

木下空太郎譯の『子不語』

中野 清

専修大学経営学部兼任講師

世の中國文學研究者がまだ知らなかった、『子不語』の翻譯が有った。いちばん古い譯である。^(註)

木下空太郎譯『支那傳説集』世界少年文學名作集第十八卷。大正十年（一九二二）七月二十日。精華書院。

座右寶刊行會による重版が、昭和十五年（一九四〇）十二月二十五日に發行されている。

この書にたどりついたのは、図書館のOPACシステムの發達に負うところが多い。

木下空太郎といっても、医師・詩人・森鷗外の弟子くらいの知識しか持ち合わせていないが、この譯文は「少年文學」を意識したためもあるが、平易で明快な明治・大正時代の口語文章語で書かれており、漢文くささがほとんどないことに驚かされる。

全六十三話のうち四十八話が『子不語』・『續新齊諧』から採られているので、これを『子不語』・『續新齊諧』の抄譯と見ても特にさしつかえはないであろう。

精華書院版・座右寶刊行會重版ともに「日本の古本屋」サイトで検索した結果、意外なことに共に複数の出品が

あったので各一冊入手した。

精華書院版にカバーや箱が有ったのかどうかは不明であるが、現在手元にあるものは裸本である。

書誌的データは以下のとおり。四六判ハードカバー、三十五字十二行。序十五頁、目次六頁、本文四〇三頁、総ルビ。口繪（漢帝廟内部）木村莊八。挿繪寫眞版同氏所藏とある。口繪はカラー印刷で水彩畫のようである。漢帝廟は關帝廟の誤植であろう。挿繪は計三枚で白黒寫眞、共に年畫の寫眞である。序のみ赤い文字で印刷されている。奥付、世界少年文學名作集（第十八卷）、定價二圓五十錢、大正十年七月十五日印刷、大正十年七月二十日初版發行、大正十年十月二十日四版發行とある。この四版は今でいう四刷であろう。

座右寶刊行會重版は、四六判ハードカバー、序・重版序三十六字十三行十七頁、目次五頁。本文四〇字十四行、三三七頁、パラルビ。奥付、昭和十五年十二月二十日印刷、昭和十五年十二月二十五日發行、定價一圓八十錢の上（停に丸）とある。戦時下のなにかの統制の印なのである。

物資不足気味の時代に少しでも豪華な本を作ろうとしたのであろう、カバー装釘は梅原龍三郎の天壇を描いた繪が原色で使われている。七十五年前のものだが幸い保存状態はよい。

以上二種の單行本以外に、『木下太郎全集』第二十卷（一九八二年五月十八日。岩波書店。二五三頁〜五二六頁）に収録されている。以下引用は全集版からとする。

その序文（全集二五五〜二六二頁）に、

本書は主として支那近世の小説集「新齊諧しんせいがい」（別名、子不語しふご）から抄譯し、「聊齋志異れうさいし」「廣異記くわうい」等のものをも少し加えました。

私がかくの如く支那小説を翻譯するに至ったのは、全く偶然のことです。昨年春上京の節「少年世界文學」の爲めに何か獨・佛作者のものを翻譯するように約束しましたが、其後自分の藏書に於ても、東京の書肆に於ても適當の書籍を捜し求めることが出来ず、そして私は約半箇年間支那南北地方を旅行して、支那の傳説に對する興味が旺んくなって居ましたから、いきなり座右にある支那の小説集を取つて之を抄譯して、責を塞いだのです。
（中略）

私はその爲めに二、三、四月中の幾夜かを割いたのに過ぎませんから材料の選擇は粗漏で、翻譯は杜撰です。また支那の小説を翻譯すると云ふ爲事その事が私の得意のものではありませんでした。

唯私が支那、殊に江南地方を旅行して後是等の小説を讀んで見ると、其土地其風俗に對する理解を細密にすることが出来て、私に取つては非常に面白く感じたのです。

なぜこの翻譯を始めたのかを説明しているが、「座右にある支那の小説集」というところが興味深い。これは「約半箇年間支那南北地方を旅行し」た時に手に入れた物なのであるうか。

以下「全集版」で約六頁の中國幽冥界の概説を書いている。これがかなりよく書けているので、ご紹介する。

支那の小説を讀むと、人間の精神及び肉體が三つの成分に區別せられてゐるのを知ります。第一が「魂」であります。（中略）

肉體と精神との間には、なほ一層低い精神があります。それが「魄^{はく}」であります。魄は自覺がない魂で、唯肉體の生活を統御するだけの作用を有するものです。是れは肉體の死に伴つて、早速消滅するものですが、萬一に

それが非常に生き強いと、魂のない肉體が、なほも長く生存を持續して、道德的意識のない痴呆漢の如くいろいろの悪事を爲ます。之を或は「僵尸きやうし」と曰ひ、或は「走尸そうし」と曰ひ、或は「尸走」と曰ひます。それは臂力が強く、どうすることも出来ませんが、唯箒を持つて來て拂ふと其の能力を失ふと云ふことです。

ここで「僵尸」について説明しているが、これは『子不語』卷五の「畫工畫僵尸」の要約に過ぎない。僵尸の魘勝法はこれだけではない。

人間が死ぬと魂は「陰府」に行きます。即ち世界は「天」と「陽界」即ち人間世界と、「陰府」即ち地獄とから成立つて居るのです。

所で「陰府」も亦人間世界と同じやうな組織になつて居り、蘇州スウチオウとか杭州ハンチオウとか云ふ大きな都會には「城隍神じやうくわん」があつて之を支配して居ます。即ちそれは大都會の守護神です。その下位に「土地神」があります。小さな村落、市街の神です。又各個人の家いえの守護神は「竈君さうくん」です。之は其家の祖先の靈であります。城隍神じやうくわん又は土地神には學問のある人が死んだ場合に任命せられます。(中略)

この「竈君」の説明はなにかの勘違いであろう、「竈君」は先祖の靈ではない。

人間世界や地獄の事は天に在る「上帝じやうてい」が一切知ろしめすのですが、近世の小説には上帝は殆ど現れて來ないで、其役は専ら「關帝くわんてい」が代理するやうです。支那の小説を讀むと、關帝は天と陰府との間を、始終自由に

往復して居るやうに見えます。

關帝は靈界に於ける最後の審判官ですが、然し人間の運命を掌る神は別にあります。即ちそれは「泰山」或は「東嶽」の神です。此には人間の壽命や榮達等を預定した帳簿が備へ付けてあつて、各府縣の城隍神又は土地神の處には、それぞれ府縣下の部分の寫しがあります。それに疑義の起こつた場合には泰山の原簿に引き比べて判定するのです。唯關帝は人間運命の規定を幾分變ずることが出来ます。

さて陰府に下つた魂は、今度は新しく生れる人間の肉體に宿つて再生するのです。即ち佛教に於ける輪廻の思想は、また近代の支那小説のうちに攝取せられて居るのです。（中略）

是等の轉生の事は皆やはり泰山の帳簿または城隍神、土地神祠の分冊の上に載つて居ますから、一旦陰府に到ると、ひそかにそれを知ることが出来ます。が、陰府まで往かずとも、往往三世の運命を寫す鏡があつて、自分の姿をそれに寫して前世及び後世の相を知ることが出来ます。

自殺したり、人に殺されたり、無實の罪で死んだり、或は逆旅に死して其親族が紙錢を焚いてやらないやうな場合には、魂がまつすぐ陰府に到つて、再生の機會を求めることが出来ないで、中有に迷ひます。或は生前の罪の爲めに地獄で刑罰を受けて、再生することの出来ないがあります。是等の亡靈をば「鬼」と謂ひます。或は特に「冤鬼」とも云ひます。

鬼はしばしば人間世界に出て來て仇をします。即ち自分を殺した人に復讐をしたり、又自殺したものなら他人に自殺を勧めたり、或はまた縁もゆかりもない他人を害したりします。

ここで自殺鬼の求代について説明している。ここから陰府についての説明があるのだが、あまり長くなるので以

下は省略する。そしてこの概論の終わりに、

以上の事は「聊齋志異」や「新齊諧」を抄譯して、その説話の内容から歸納した解釋です。

と記している。

また重版の序（全集二六三頁）に、

もともとそれは自分から欲して爲た事ではなく、ただ當時一友人の經營してゐた書店の懇望によつて試みたもので、私としてはその爲に到頭支那旅行記を作る機會を失つてしまひました。其書店が「少年世界文學」と云ふ叢書を發行し、私にも是非一冊引受けてくれと云はれ、深くも考えないで、主として「新齊諧」（一名「子不語」）のうち少年に向くようなものを集めたのですが、然し今考へて見ると、是れが果して「少年文學」の範疇に入るものかどうか大に疑はしいのであります。

たしかに『子不語』は子供むきの読みものにふさわしいものではない、と筆者は考える。男女の話、サディズムの話などもあるのである。

例えば、『山東の林氏の話』（全集三〇四〜六頁）というのがある。『子不語』卷二の『山東林秀才』の譯である。

山東の林秀才が四十歳を過ぎても、次の試験（郷試）に受からないので、もうあきらめようとしていたところ、幽鬼に「あきらめないで私の仇をとって下さい。私は殺されて掖縣に死體を埋められているのです。貴方はこれこ

れの日に試験に受かり、進士の學位を得て、掖縣の知事になります」と言う。しかし郷試は受かったものの、進士にはなれなかった。

それで、「人の出世のことは鬼でも分らないのかなあ。」と歎息しました。

すると空中に聲があつて林さんリンに曰ひました。「貴方の出世の遅れたのは貴方御自身の咎とがの爲で、私の預言が間違つたわけではないのです。實は私が貴方にお目にかかつたのち、貴方はこれこれの日にこれこれの悪事をしました。そんなことは世間の人には分からないで過ぎましたが、地獄の帳面にはちゃんと載つて居るのです。然しまあ大した罪でもありませんでしたから、その罰ばつも寛ゆるかで、唯貴方の出世が二年遅れただけなのです。」

林さんリンはその事を聴くと、身に思ひ當たるところがあつたから、はつとびつくりして、それからは身の行つしを慎つつしみました。そして二年経つて始めて掖縣イェンセンの知事に任命せられました。

掖縣イェンセンに赴任ふにんして、城内を一巡し、果して東門外に大きな石臼の轉つてゐるのを發見しました。それを取り除いてその下の地面を掘らして見ましたところ、人の屍體しかたいが出て來ました。

それで張某チヤンボウといふ人を捜させて之を訊問じんもんすると、その人が果して下手人げしゅにんでした。

それでその人を刑に處しました。

（新齊諧卷二「山東林秀才」）

筆者の譯文と、書き下し文、原文をあげておく。

林が嘆いて、「この世の出世についてだけは、幽鬼にもわからないことがあるようだな」

とつぶやくと、その言葉がおわらないうちに、空中から聲がして、

「あなたの行いにあやまちがあっただけですよ。私がウソをついたわけではありません。あなたは某月某日に、未亡人の某と浮氣をしたでしょう。幸い妊娠はしなかったし、他人に氣づかれてはいないけれど、あの世の裁判所ではちゃんと悪事を記録しているんです。今回は少し罪を軽くして、合格を二回遅れさせる（六年遅れる）ことになったのです」

林はぞっとした。それから身をつつしんで善行に心がけたので、二回の試験を見送ったのち、進士に合格できた。幽霊の預言どおり掖県の知事に任命され、赴任して城内の巡視にでかけると、城門のかたわらに石臼がある。そこで調べてみると、石臼の下から死體が発見された。

すぐに張某を拘束して取り調べると、殺人の次第をすべて自白したので、法に照らして厳正に処罰したのである。

林歎じて曰く、世間功名の事は鬼も亦た知らざる者有るか、と。言未だ畢らざるに、空中に又た呼びて曰く、公自行ひに虧くこと有るのみ。我が誤報に非ざるなり。公は某月日に於て私に孀婦某と通ずるも、幸に胎を成さず。人の知覺する無きも、陰司は其の悪を記して其の罪を寛うし、罰して二科を遅らしむ、と。林悚然として身を謹み善を修め、二科を逾えて進士と成る。官を掖縣に授けられ、任に抵り城に進めば、一石磨を見る。これを啓くに果して尸を得たり。立ちどころに張某を拘しこれに訊くに、盡く殺人の情實を吐けば、これを法に置す。

林歎曰、世間功名之事鬼亦有不知者乎。言未畢、空中又呼曰、公自行有虧耳。非我誤報也。公於某月日私通孀婦某、幸不成胎。無人知覺、陰司記其惡而寬其罪、罰遲二科。林悚然謹身修善、逾二科而成進士。授官掖縣、抵任進城、見一石磨。啓之果得尸。立拘張某訊之、盡吐殺人情實、置之於法。

要するに、「少年文學」にはふさわしくない「不倫」という部分をカットしたのである。これはまあ當然の配慮だと考えられる。

いささか科擧についての勘違いが見られる。

そして二年経つて始めて掖縣の知事に任命せられました。

という部分だが、これは

合格を二回遅れさせる（六年遅れる）。

ということである。科擧は通常三年に一度の試験である。

一方では、こんなに削るのならば別の話を譯せばいいのにと思えるものもある。

『平陽縣の縣令の話』（全集三二七―九頁）というのがある。『子不語』卷二の『平陽令』の譯である。

昔、山西省の平陽縣の縣令に朱鏤と云ふ人がありました。性質が残酷で、兎角面白からぬ噂のあつた人でした。

その人が或歲平陽縣の任期が満ちて、今度は山東省の方の一縣に轉任することになって、家族のものを大勢一緒に連れて任地に向かひました。
（新齊諧卷二「平陽令」）

まず「山西省の平陽縣の」というところ、山西省の平陽縣は漢から隋まで存在したが、清の平陽縣は浙江省温州府の平陽縣である。

「今度は山東省の方の一縣に轉任」とある部分は、「俸の滿つるを以て山東の別駕に遷さる」ということなので、「任期満了で山東省の某府の通判になった」ということ。

別駕は通判の通稱である。知府を補佐する役職で同知の下、府の三位なので俗に三府とも言う。正六品官なので、知縣（正七品）から榮轉ということになる。

筆者の譯文と、書き下し文、原文をあげておく。

平陽（浙江省）の縣令朱鏐は殘酷な男であつた。彼は自分が治める土地では、特別に厚い首枷や大きな梃子（拷問の道具）を造らせた。事件が女に關係するものであれば、かならず邪心をもつて尋問した。妓女をむち打ちの刑にするときなど、下着を脱がせその陰を打ち、數カ月のあいだ腫れ続けるほどのめにあわせ、

「これでどう客をとるのか見てやろう」と言つて、遊びにあがつていつしよに捕まつた客の顔に、その妓女の血を塗りつけた。

妓女でも美人であれば、よけいに殘酷な刑を加える。髪の毛を切つて坊主頭にし、刃物で鼻の穴を切りひろげたりした。そして、「美人を醜くすれば、妓女遊びなどはなくなるものだ」とうそぶいていた。同役と會えばいつも誇らしげに、「私のように色氣などに動じない、鐵面冰心のものでなければこうはいきませんよ」と説いていた。任期が終わり、山東の通判に榮轉ということになり、家族をつれて荏平縣（山東省）の旅館にまでやつてきた。

平陽の令朱鏐は性慘刻にして、宰する所の邑に別に厚き枷かせおれ巨なる梃ていを造らしむ。案婦女に涉れば、必ず引き入れて姦情もてこれを訊す。妓を杖するに小衣を去り、杖を以て其の陰に抵あて、腫をして潰せしむること數月に

して、曰く、渠かれの如何にして客に接するを看ん、と。臂の血を以て嫖客の面に塗る。妓の美なる者には酷を加へ、其の髪を髡そり、刀を以て其の兩鼻孔を開きて、曰く、美なる者をして美ならざらしめば、則ち妓風は絶へん、と。同寅官と逢へば、必ず自ら詫はりて曰く、色を見て動ぜざること、吾が鐵面冰心に非ざれば、何ぞ能く此の如くせん、と。俸の滿つるを以て山東の別駕に遷さる。眷かそくを挈たづへ荏平しへいの旅店に至る。

平陽令朱鏐性慘刻、所宰邑別造厚柳巨梃。案涉婦女、必引入姦情訊之。杖妓去小衣、以杖抵其陰、使腫潰數月、曰、看渠如何接客。以臂血塗嫖客面。妓之美者加酷焉、髡其髮、以刀開其兩鼻孔、曰、使美者不美、則妓風絶矣。逢同寅官、必自詫曰、見色不動、非吾鐵面冰心、何能如此。以俸滿遷山東別駕。挈眷至荏平旅店。

この赴任の途中に泊まった旅館で妖怪に祟られ、夜中に出てきた妖怪をバタバタと斬り倒すのだが、朝になってよく見てみると、斬り殺したのは全て朱鏐の家族であった。朱鏐は悶死したという話なのだが、このような報復を何故に受けなければならないのが、「性質が残酷で、兎角面白からぬ噂のあった人でした。」というだけの説明では説得力を持たないのである。

並外れたサデイストだったので、このような報復を受けたのだが、いかに残酷であったのかを譯さないのなら、他に少年向きな話をえらんだ方がいい。

ともあれ平易で明快な譯文と、「中國幽冥界の概説」は出色のものである。一讀をおすすめる。

【注】他の邦譯は以下のとおり。

岡本綺堂譯『支那怪奇小説集』。サイレン社。昭和一〇年。文庫本化されている。

邑楽慎一譯『近代支那伝説集子不語』。長崎書店。昭和十六年八月。
 今村与志雄譯『中国古典文学全集第二十卷』。平凡社。昭和三十三年四月。
 前野直彬譯『中国古典文学大系第四十二卷』。平凡社。昭和四十六年二月。
 中野清譯『孔子が話さなかったこと』。情況出版。一九九八年八月。
 手代木公助譯『子不語』一〜五。平凡社東洋文庫。二〇〇九年。